

名作を歩く

ひょうごの近代文学

— 11 —

米騒動の真実と滅びの美学 鼠―鈴木商店焼き打ち事件―

城山三郎

△一鈴木商店が、天下の不満を一身に引受けた形となった。焼き打ちを知って、西川はじめ鈴木商店の社員たちが駆けつけた。だが、夜空を焦がさんばかりの炎、十重二十重に囲んで喊声を上げる群衆相手に、手のだしようもない。▽

一九一八年(大正七年)八月十二日夜。神戸の湊川公園に集まった数千の群衆が、鈴木商店に押しかけ、火を放った。さらに、大番頭金子直吉を捕まえると騒ぎ、その首に当時で金十万円もの賞金を懸けた。米価大暴騰は、鈴木商店の大量の米の買い占めが原因といううわさが流れた。ある新聞が繰り返し報じた。鈴木は財界の悪役で、あくどい商売が生活難にあえぐ庶民の反感を買ひ、焼き打ちに遭ったのだ、と。

◇ ◇ ◇

お年寄りが木陰で将棋を楽しむ湊川公園。ここを起点に群衆のルートをとどめてみる。パチンコ店が軒を連ねる新開地商店街を南に抜けて、なだらかな下り坂の多間通りを東に。JR神戸駅東のガード下をくぐる。湊川公園から一歩半、時間にして三十分余り、当時、東川崎町一丁目(現在栄町通七丁目)に、ミカドホテルと呼ばれる豪華な旅館を改装した鈴木商店が確かにあった。今、面影を残すものはない。鈴木跡にはクリム色の外壁の神戸地方貯金局が建っている。

鈴木商店の栄枯盛衰を描いたノン・フィクション小説の著者△私△は、米騒動から焼き打ちに至る経過に疑問を抱く。米騒動の研究文献を分析し、鈴木商店生き残りの人々から取材を始める。火を放った人物や鈴木攻撃の記事を書いた新聞記者からも裏付けを取る。事件の真相を求めて、神戸や鎌倉を歩く△私△は、まるで目撃者を捜す刑事のようだ。

砂糖輸入がメインの個人商店にすぎなかった鈴木は、第一次世界

大戦後の景気をバネに世界的な大商社に躍進する。焼き打ちの前年の一七年(大正六年)には、貿易年商で三井物産を抜き日本一の座に就く。最盛時の鈴木系企業集団は六十五社からなり、従業員総数は二万五千人を超え、商社の国内外支店は百五十カ所に及んだ。

しかし鈴木だけが米騒動の悪役を引き受け、どうして他の商社は見過ごされたのか。そして社会の公器であるべき新聞が鈴木を諸悪の根源と書きたてたのはなぜか。

△私△は、当時の政府の実力者が金子直吉と親交があったため、反対派の派閥や一部の新聞が、内閣打倒運動の格好の標的として鈴木を攻撃、それが世間の誤解を招くことになった、と時代背景を説く。買い占めの事実ではつち上げで、むしろ鈴木は米価値下げに貢献していたことが明らかになる。刑事は一躍冤(えん)罪事件の弁護士に。米騒動のスケープゴート、歴史の犠牲者である鈴木を救済を痛快なまでにやってのける。

同時に△私△は、丁稚(てつち)上がりの大番頭金子直吉の劇

金子直吉翁五十周忌謹而修し奉ります。三菱・三井を凌ぐ鈴木商店の隆盛を計られし御手腕まことに敬服の至りであります。小生本年93才恙なく暮らして居ります。

加藤 福雄

(逗子市)

四年脳前卒中中で倒れて以来現在リハビリテーションを続けて居ります。身体はまだ健康ですが何分歩けないので自宅療養を続けて居ります。

(89才)

町田 叡光

(東京都)

謹んで金子翁の不退転の御生涯を偲び御冥福をお祈り申し上げます。お陰様にて引き続き夫婦とも元気に過ごして居ります。

(88才)

田中 清

(京都市)

●平成六年
米寿祝い対象者紹介
(明治40年生)

◎中屋伝太郎 ◎松本三四郎

●平成六年
喜寿祝い対象者紹介
(大正7年生)

◎鈴木 治雄 ◎横田 周作

◎森 駿郎

●平成五年

秋の叙勲 受章者の紹介
栄えある叙勲 受章心からお祝い申し上げます

◎荒木 正雄(勲三等 瑞宝章)

日商岩井(株)元副会長



物 故 者 名 簿

辰巳会事務局

御 芳 名	死 亡 年 月 日	享 年	最 終 勤 務 先
五十嵐 集	平成5年2月10日	89才	帝人・元本部幹部 専務
西 川 一 蔵	〃 3月24日	82才	
大 松 康 祐	〃 5月26日	91才	大 阪 支 店
広 野 敬 吾	〃 7月9日	99才	帝国造船(株)・国際汽船(株)
森 田 定 雄	〃 7月12日	88才	
佐 野 寿 夫	〃 7月13日	91才	東京支店輸入木材部
尾 田 英 一	〃 10月27日	82才	大 日 本 塩 業 (株)
野 原 博 明	〃 11月19日	89才	本店為替課
小 倉 五 郎	平成6年1月4日	94才	(株)日本商業経理課・元本部幹事
岡 本 佐 四郎	〃 1月5日	89才	本店麦粉課・元本部幹事
外 島 健 吉	〃 1月17日	68才	帝人(株)相談役・元社長
中 嶋 儀 一	〃 1月23日	91才	(株)神戸製鋼所相談役・元社長
橋 本 知 一	〃 1月30日	80才	日商岩井(株)・元監査役
	〃 2月11日	93才	東 邦 金 属 (株)・元常務

読者新聞 日曜版



「不遜な定説」この足で踏んづけた 歴史のほころび 掘り出した神戸

城山三郎

後ろから迫る六甲山系と帯状の都会。ましてダイヤをちりばめたような夜景が加わると「そんな眺めはそうあるもんじゃない」と。神戸を語る城山三郎さんの言葉には力がこもる。「アパートでも借りようかと思った」ほど、長期取材したことがあるからだ。

昭和三十六年夏。小わきにメモ用のノートと地図を抱え、城山さんは、ある事件の生き証人を次々と探し歩いていた。

鈴木商店焼き打ち事件。大正七年八月十二日夜、神戸市栄町通に本社があった新興財閥が、米の買い占めをしているとうわさされ、群衆に焼き打ちされた米騒動史上の重大事件だ。

鈴木商店は鈴木ヨネという女主人の小さな砂糖商が前身だ。大番頭の金子直吉によって急成長、一時は日本最大の総合商社に。昭和二年の金融恐慌で倒産したが、神戸製鋼、帝人、日商岩井など分身の企業を多く残している。

直木賞受賞後も、愛知学芸大で景気論などを教えていた城山さんがこの事件を調べてみる気になったのは、大番頭の人となりに興味を抱いたからである。

それまでの定説では、金子直吉は「あくどい商売をしたやり手の番頭」ということになっていた。城山さんもそれを信じていた。ところがある時、亡夫が同商店に勤めていた知人から「大番頭の金子直吉は今も内部の多くの人に慕われ、法事が行われている」と聞かされ、ひよっとしたら「歴史のほころび」を予感したのだ。

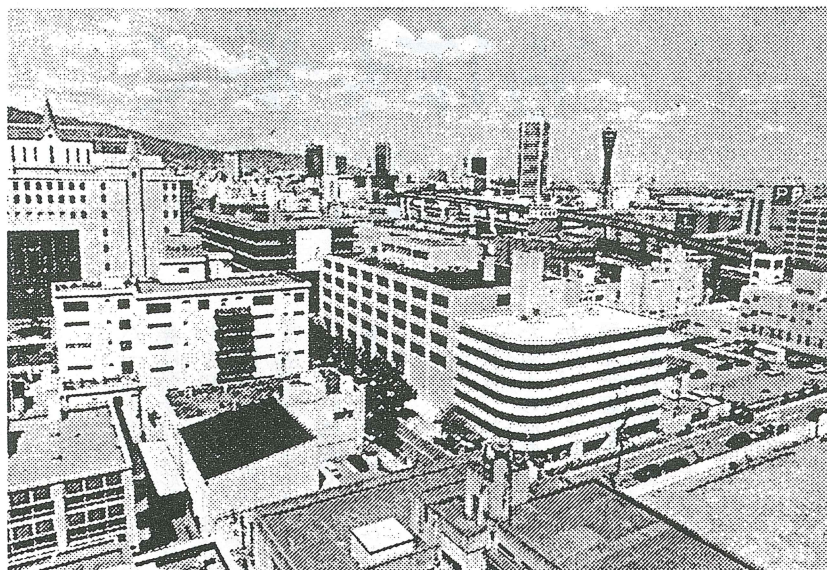
△歴史の教科書では悪の権化のように糾弾されているが、本当に買い占めをやったのか。その根拠は何か。金子が周辺の人々に慕われるのはなぜか。金子という人間のなぞに迫ってみたい。△歴史の洗い直しが始まった。

中央区楠町。まだ市電の走っていた大通りでタクシーを降りると、城山さんは元会社社員宅を訪ねた。大学の歴史学研究会が発行した小論文集の中で「米は鈴木商店が買い占めていた。青田買いまでしている」と語る証言者三人のうちの一人だ。この小論文はその後、本格的な米騒動研究書の下敷きになっていた。

だが、証言の根拠をただすと「うわさ」か「新聞記事」だった。元米店主や元神戸証券取引所理事長らの証言も信びよう性に欠け、都合よく予断によって圧縮されていた。「学生の集めた情報も、学者が発表すれば権威ある歴史的証拠になる。歴史というのは信用できないものだと思いましたね」

同商店の生き残りの人たちが確証もなく買い占めを執ように攻撃

繁栄する遺物ない巨大商社



ビルが立ち並び、栄町通りから市電が消え、街は姿を変えた。現在の神戸地方貯金局(中央の6階建て)あたりに鈴木商店があった＝神戸市中央区栄町通

表題の△鼠△は金子の俳号「白鼠」に由来する。福の神の大黒さんの使いである白鼠は、住む家に繁栄をもたらすという。直吉の表現にこれ以上ふさわしい言葉はない。度重なる新聞の攻撃に対して、

△鼠△はこう語る。「鈴木が潔白であることは、眼のある人なら知って居る。鈴木は感謝されても怨まれることはない。人を信じて疑わない無邪気さはまるで子供のようだ。激動する社会に対して、動物的カンとひらめきだけで仕事を続けた直吉によって、鈴木商店は興り、そして滅んだのだろう。鈴木崩壊の際にひとつのエピソードがある。会社整理が大詰めを迎えた時、銀行は鈴木から直吉の退陣を要求した。それをのめば鈴木は救われる、という事態に直面しても社長の二代目岩次郎は、鈴木と直吉の運命を共にすることにした。直吉の忠誠心に報いると同時に、主家としての鈴木への誇りお保つ。その選択はまさに「滅びの美学」そのものだ。中央区海岸通から栄町通、東川崎町へ、再び海岸通へ。鈴木商店は成長する度に店の場所を変えたが、跡にその繁栄を示す遺物は一切ない。

昭和三十四年、鈴木OBで結成された「辰巳会」。百十九人いる会員の平均年齢は八十八歳になり、直吉を直接知る人も少なくなった。



落ち着いた雰囲気洋間。当時、直吉はこの部屋で来客をもてなしたという＝神戸市東灘区御影中町

それでも直吉死去五十年目にあたる今年は、追悼の会に全国から九十二人が集まった。「金子さんは父の自慢の種でした」。鈴木商店マンの父を持った息子から、会合の度に今でもこんな声が寄せられる。

直吉が晩年を過ごした家は、今でも神戸市東灘区の阪神御影駅近くにある。くすんだ色の洋館で、

的な生涯にひかれていく。私利私欲を持たない金子は、国益志向という経営理念と主家への揺るぎな

き忠誠心のもと、事業の拡張のみを生きがいとして鈴木を巨大商社に育て上げた。